

## 「牛頭天王縁起」に関する基礎的研究

二二六

鈴木 耕太郎

はじめに

「神仏習合」「本地垂迹説」の研究を切り拓いた辻善之助の記念碑的論考、「本地垂迹の起源について」が『史学雑誌』誌上に発表され、一世紀近くが経とうとしている<sup>①</sup>。当然この間、辻論考をいかに批判し、修正し、乗り越えるかが常に課題となってきた<sup>②</sup>。その結果といべきか、今日の研究動向を見るに、「神仏習合」、「本地垂迹」の捉え方は辻が見たそれと大きく異なるものになっている。

「神」「仏」という存在の流動性、「神」「仏」の二項対立的な見方への批判<sup>④</sup>、日本固有の宗教的特徴とは言い切れなくなった「神仏習合」――近年の「神仏習合」に関するこれらの論点からも、この研究が一つの転換期を迎えていることが分かる。そしてそれは、「神仏習合」「本地垂迹」という枠組みをも根本から見直すことにも繋がっている。

ところで、「神」「仏」に区分できない「カミ」の中には、牛頭天王も含まれる。近世中期の国学者、天野信景が指摘するように、牛頭天王の名称は『華嚴経』始め、幾つかの經典類に見られる「牛頭栴檀」からの由来であろう<sup>⑥</sup>。また、室町期成立と思われる『祇園社略記』では、祇園社祭神について仏家は牛頭天王、神家は素盞烏尊、曆家は天道神と称していたことが分かる<sup>⑦</sup>。そのため、牛頭天王は仏菩薩に近い存在として、慶應四年（後に明治元年に改元・一八六八）三月の神祇官事務局通達、いわ

ゆる「神仏分離令」にて、「中古以来」、「仏語ヲ以神号ニ相称候」ことを理由に名指して排斥の対象とされたのである。

一方、『溪嵐拾葉集』では陰陽道の鬼神として牛頭天王が仏、如来と対比されていることや、陰陽道の神（曆神）である天道神が、『三国相伝篋篋内傳金烏玉兔集』（以下、『篋篋内傳』）で牛頭天王と同体視されていることなど、牛頭天王が単純に「仏」の類であったとも言い切れない。

ここに「神」でも「仏」でもない「カミ」の象徴的存在としての牛頭天王が浮かび上がってくる。もちろん、牛頭天王信仰の解明は、「神仏習合」研究において重要である。しかし一方で、従来の「神仏習合」という枠組みを脱却しなければ、その解明は難しい。

例えば信仰、祭儀の「場」をいかに捉えるかという課題がある。信仰を伝える各主体（宗教実践者）による祭儀の「場」の違い、さらには時間軸や地域性など物理的な違いを無視し、牛頭天王という「カミ」を一つの像に規定することには無理が生じる。牛頭天王は、それぞれの「場」において、それぞれ固有の姿を現していたのではないか。

ここで大きな鍵を握るのが、各地に残されている「牛頭天王縁起」である。北条勝貴は「縁起」に見られる「聖地」（場）との関連性について、「お互いがお互いを規定しつつ、常に新しい存在へと生まれ変わらせてゆく」ような「相関関係」が見られると説く<sup>⑩</sup>。果たして「牛頭天王縁起」はどのような「場」で用いられ、またどのような「場」を物語るのか。

それら一つ一つの縁起を地道に読み解くことこそ、それぞれの「場」における信仰の在り方を解明することへと繋がるであろう。

ただし、本論はどのような個別具体的な縁起の読解、検討を目的としない。むしろ、これまでの先行研究を踏まえ、整理した上で、先行研究では余り重視されてこなかった、各縁起の読解に入る「前段階」の作業、考察に重きを置きたい。そうした基礎的とも思われる作業、考察を経なければ、各「牛頭天王縁起」本文の異同や「場」によって生じる信仰の差異への言及に終始することになりかねない。差異を前提とした上で、それぞれの縁起世界がどのように独自の「場」を創り出し、他方でそれぞれの縁起や「場」がどのように関係し、影響を及ぼしていくのかを検討することがまず求められる。

本論では、牛頭天王信仰、とりわけ「牛頭天王縁起」に関する先行研究を踏まえ、整理した上で、先行研究では殆どなされてこなかった「牛頭天王縁起」の定義に関して検討を加え、さらにその定義を踏まえた上で「牛頭天王縁起」を大まかにではあれ分類する。そして、これらの作業を経てどのような「場」で「牛頭天王縁起」が受容されたのか、大掴みであれ掴むことを目的としたい。

### 一、先行研究の整理と課題

本節では、牛頭天王信仰、とりわけ「牛頭天王縁起」に関する先行研究を整理し、また現段階での課題を捉えたい。先行研究では、中世以降の牛頭天王信仰がいかに広がり、またその背景には何があったかを総論的に述べる機会はほぼなかった。もちろん、「広がり」といっても、牛頭天王を祭神とする祇園社や津島天王社などでの信仰、祭儀の「場」と、法師陰陽師や修験者、或いは「太夫」や「博士」といった民間の宗教者

実践者を中心にしたの「場」とが同質であったとは考えにくい。そこには、牛頭天王信仰という言葉では括りきれないバリエーションがあったといえよう。そのような中で、近世期では天野信景や平田篤胤<sup>11</sup>、小林百枝<sup>12</sup>、松浦道輔<sup>13</sup>といった国学者たちが、牛頭天王という存在について検討してきた。そこで彼らが導き出した牛頭天王像こそ、仏菩薩に近い存在であり、あるいは暦神であった。不幸にも明治維新期において、そのような牛頭天王は排斥の対象となり、必然的に牛頭天王信仰について本格的に論じた研究も見られなくなるのである。

このような研究動向が変わるのは、アジア太平洋戦後終了後になる。中でも、三崎良周はいち早く牛頭天王に関する本格的な論考を発表した一人であろう<sup>14</sup>。三崎は、『阿婆縛抄』、『覚禪抄』といった台密、真密の事相書などから牛頭天王に関する記述を拾い、整理した。その結果、中世期におけるそれら密教と陰陽道、宿曜道との密接な関係によって、牛頭天王の複雑な習合関係が生じたとの結論に至った。この三崎の研究は、牛頭天王の複雑な習合関係を仏典等から整理したという点で先駆的業績といえよう。ただし、仏典によって異なる習合関係を、牛頭天王という「共通項」を用いてイコールで結ぶかのような姿勢も同時に見られる。

また、牛頭天王の習合関係を述べたものとしては、吉井良隆による論考がある<sup>15</sup>。吉井は、『釈日本紀』所収の『備後国風土記』逸文（疫隅国社縁起）の登場する武塔神には、その信仰を物語る説話があったと推察し、また武塔神は牛頭天王とは別系統の異国神、疫神であり牛頭天王より早く日本で信仰されていた、との説を立てた。さらに、スサノヲと武塔神とが結びついた理由については、『日本書紀』巻第一第七段一書に見られるスサノヲ追放譚におけるスサノヲ像と武塔神とが重なる部分があったからではないか、と述べている。スサノヲと武塔神との重なりという点では、論拠に欠けているが、牛頭天王と武塔神とが別系統の神で

あり、それぞれ別に信仰があったのではないかと、とする見解は重要である。この『備後国風土記』逸文は、後述するように牛頭天王が登場したため、「牛頭天王縁起」として位置付けることは難しい。ただし、この縁起を用いて下部兼文が講義を行なったことで、祇園社祭神とスサノヲとが結び付けられる素地が形成されたことは間違いない。<sup>16</sup> 斎藤英喜は、下部兼文・兼方がスサノヲと祇園社祭神とを結びつけた後も、吉田兼俱が登場するまで祇園社祭神の呼称は流動的であった、と指摘している。<sup>17</sup> 兼俱は牛頭天王とも武塔天神とも呼ばれていた祇園社祭神を「皆素彘鳥ソ」としてスサノヲであると捉え、一方、祇園社僧はあくまで牛頭天王を祭神と見なしていたという。この斎藤の指摘は、後述する「牛頭天王縁起」を「中世神話」として捉えることで明確になるものであり、示唆深い。

次に本論で中心的に取り上げる「牛頭天王縁起」に関する先行研究について検討したい。

まず「牛頭天王縁起」研究では、西田長男の論考は見逃ごせない。<sup>18</sup> 西田は、いわゆる「祇園牛頭天王縁起」のみならず、牛頭天王が登場する祭文類や『簠簋内傳』、さらには日本で成立したと思われる牛頭天王に関する偽経なども用いて、その信仰の広がりを論じた。各縁起の中から、それぞれの信仰の「場」が立ち現われることを示しており、「牛頭天王縁起」研究の嚆矢となった論考といつて良い。

また西田をさらに補った論考が、松本隆信による論考であろう。<sup>19</sup> 松本は、西田が紹介しなかった『須佐神社縁起』なども含め、その縁起に見られる縁起説話の展開を論じた。また、偽経類が牛頭天王縁起の成立に深く関与しているとの指摘は、先の三崎の論考に通じるところもあり、今後さらなる検討が必要となる。ただし、松本が捉える「牛頭天王縁起」は、「話の大筋もほとんど変わっていない」ものである。「話の大筋」とは

恐らく、蘇民将来譚を指すのだろうが、果たして蘇民将来譚にそった縁起だけが「牛頭天王縁起」といえるかは、疑問である。さらにいえば、西田や松本含め「牛頭天王縁起」を用いた諸論考の中で、「牛頭天王縁起」とはどのようなものか、その定義を論じるものがないという大きな問題がそこから見えてくる。それ故に一つ一つの縁起に迫る個別具体的な視点と、各地に残る「牛頭天王縁起」を俯瞰的に眺め、それらの縁起の相互の影響を模索する俯瞰的視点とがクロスせず、総合的に論じられてこなかった。この点はまた次節に譲りたい。

他にも岩佐貴三<sup>20</sup>や村上學<sup>21</sup>、今堀太逸<sup>22</sup>、八田達男<sup>23</sup>、金贅會<sup>24</sup>、宮家準<sup>25</sup>などがある。岩佐や宮家による陰陽道、修験道祭文と牛頭天王信仰との繋がりを論じる視点や、或いは村上のように具体的に『神道集』の「祇園大明神事」という個別具体的「牛頭天王縁起」の検討、或いは金のように韓国の疫神説話と「牛頭天王縁起」とに共通点を見出す研究など、その方向は多岐にわたっている。一方でマクロとミクロの視点とを重ね、牛頭天王信仰を総合的に論じるまでには至っていない。

さらに先の松本や今堀の論考では、各地の「牛頭天王縁起」を紹介しつつ、最終的に考察の帰着点として祇園社祭神としての牛頭天王の信仰でまとめようとする、いわば牛頭天王を祇園社祭神へと収斂させていく傾向が顕著に見られる。これは祇園社の創祀や、さらに祇園社そのものの機能とも関連して語られるが<sup>26</sup>現状においては、祇園社創祀やその機能を巡っては定説化するに足る史料もなく、断定することは難しい。そのため、祇園社の創祀と祇園社祭神とを結びつけて語ることは困難であると認めざるを得ない。祇園社の祭神としての牛頭天王にばかりフォーカスを当てるのではなく、別の側面からの検討を行なうべきといえよう。

確かに中世末期から近世期に至るまで、牛頭天王は祇園社祭神——或いは津島天王社や広峯社祭神——として語られることが圧倒的に多い。

しかし、中世初期から中期にかけて、果たして牛頭天王が祇園社祭神として語られるばかりであったかは、検討せねばなるまい。例えば、『篋篋内傳』の内容が、祇園社祭神としての牛頭天王を浮かび上がらせるかといえ、やはり違う。祇園社祭神に留まらない牛頭天王像もまた見出さねばならない。

そこで着目されるのが、「牛頭天王縁起」を「中世神話」として見るという方法論である。先にあげた斎藤や山本ひろ子の研究は、そうした各「牛頭天王縁起」を「中世神話」として読み解くことで、縁起によって異なる世界を神話の「変貌」として捉え、また牛頭天王の「変貌」として捉えている。信仰、祭儀の「場」によって異なる牛頭天王とは、「神話」たる「牛頭天王縁起」が宗教実践者により読み替えられ、または新たに解釈された結果である。この視点に立てば、縁起の中で「場」そのものもまた、本質的な「変貌」を遂げることもあり得るのである。

以上、簡単ではあるが先行研究について触れてきた。なお、この他にも志賀剛<sup>③</sup>や松前健<sup>④</sup>、福田晃<sup>⑤</sup>、真下美弥子<sup>⑥</sup>らの研究にも言及すべきではあるが、これもまた稿を改め論じたい。

## 二、「牛頭天王縁起」の定義

さて、縁起そのものにそれぞれの「場」の背景が記されているならば、当然、一つ一つの縁起にもそれぞれの世界観がある。従って、一言で「牛頭天王縁起」といっても、その様態は様々といえよう。ただ、前述の通り、何をもって「牛頭天王縁起」といえるのか、先行研究ではほぼ触れられていない。そこで本節では、「牛頭天王縁起」の定義を明らかにしたい。さて、「縁起」の定義づけについては、まず桜井徳太郎の論考が挙げられる<sup>⑦</sup>。桜井は、その定義に「寺社縁起」を用い、「仏教の根本義」に則

り、「神社仏閣の草創・沿革、またはその靈験などを言い伝えた文書や詞章」の総称を「広義の寺社縁起」と、そして「草創や沿革とその靈験を強調するために「縁起」と称するタイトルをつけた、特定の文章」を「狭義の寺社縁起」と位置づけた。

この桜井の定義を「牛頭天王縁起」に当てはめると、どうなるか。例えば、先にあげた西田や松本らの論考では、いわゆる「祇園牛頭天王縁起」諸本と同様に、『篋篋内傳』や「牛頭天王祭文」類も「牛頭天王縁起」として位置づけている。しかし、これらは、特定の寺社の創始や靈験を示すものではなく、桜井の定義でいえば「広義の寺社縁起」の範疇にも入らない。必然的に、縁起の定義そのものから外れることになる。

一方、近年「縁起学」を提唱している橋本章彦は、桜井による「縁起」の定義とは異なる見解を示した<sup>⑧</sup>。橋本は、「縁起」をいわゆる寺社縁起に限らず「由来」に関わる言説のすべて」を広く「縁起」と見るべきと主張し、「モノとコトの関係性によって宗教的価値を創出する言説」には「縁起性」が見られる、即ち「縁起」研究の対象であると定義づけたのである。

『篋篋内傳』や「牛頭天王祭文」類は、もちろん牛頭天王を祀る宗教儀礼において用いられた。『篋篋内傳』であれば暦神である天道神と牛頭天王とは同体であり、かつ天道神（牛頭天王）が司る方角は「萬事大吉」と説いている。このような論理は、官人陰陽師による論理世界ではあり得ず、従って、民間の陰陽師（法師陰陽師）たちによって成立し、彼らによって用いられたものであることは、既に指摘されている<sup>⑨</sup>。このように宗教者実践者の姿が明らかになれば、自ずとその「縁起」が用いられた信仰の「場」、宗教的空間が浮かび上がってくる。『篋篋内傳』のような非寺社縁起であっても、北条が説く聖地（場）との相互連動が見られるのである。

本論では、「牛頭天王縁起」の定義を寺社縁起に限定せず、その内容から牛頭天王の由来を語り、「場」を想起させる（絵巻含む）テクスト全般としたい。しかし、牛頭天王をどの程度、信仰対象として規定しているかは、「縁起」によって「濃淡」があることも念頭に置かねばならないのである。

例えば、いわゆる「祇園牛頭天王縁起」と『簞篋内傳』とでは、前者が祇園社祭神の牛頭天王の由来譚とその利益のみを描くのに対し、後者は牛頭天王のみならず盤古王や土公神など様々な暦神の由来や利益を説くものである。そこには、「縁起」の本質的な違いがあり、それは「場」が違うことにより起因する根本的差異であることをまず認めねばなるまい。

ところで、『備後国風土記』逸文については、先行研究の多くは「牛頭天王縁起」と見なしているが、先述の通り厳密には「牛頭天王縁起」と位置づけることは難しい。ただし、この縁起がいわゆる蘇民将来譚の文献上確認できる初出であり、この縁起を元の後世、「祇園牛頭天王縁起」などが創りだされたことは明白である。そのため、牛頭天王信仰を検討する上で考察が欠かせない縁起の一つには違いない。そのため、次節の「牛頭天王縁起」の分類においては、この縁起を「牛頭天王縁起」に関連する縁起類」として、一線を画す形で掲載した。

### 三、「牛頭天王縁起」の分類

さて、前節までの内容を踏まえ、以下に「牛頭天王縁起」を分類した。もちろん、この分類では、先述した「濃淡」を判断することは難しい。そのため、横並びで比較するための材料ではなく、あくまでも、一つ一つの縁起を検討する上で必要な基礎作業であることを明記したい。な

お、近世期に入ると各地に祇園社や天王社が勧請されており、その神社の略縁起などを含めればその数は膨大になり、ともすると煩雑になりかねない。そこで本論では、特徴的と見なせるものを除き、近世以降の略縁起類については対象から除外している。

#### 〔牛頭天王縁起〕一覽

##### I 寺社縁起

##### 〔一〕「祇園牛頭天王縁起」

(一) 「祇園牛頭天王縁起」諸本

##### i 真名本

- 1 『祇園社記』卷三所収「祇園牛頭天王縁起」
- 2 内閣文庫蔵林家旧蔵 江戸初期写本『祇園牛頭天王御縁起』
- 3 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵 江戸中期写本『祇園牛頭天王縁起』
- 4 宮内庁書陵部蔵 続群書類従原本『祇園牛頭天王縁起』
- 5 刊本『続群書類従』所収「祇園牛頭天王縁起」

##### ii 真名本（異種縁起を含む）

- 1 天理大学図書館吉田文庫蔵 長享二年写本『牛頭天王縁起』  
 （※最初に「牛頭天王縁起」本文を載せ、続いて「禪觀和尚」なる人物の牛頭天王に関する「勘文」が引かれ、更に祇園社と浄土宗との関係性を述べる説話が続いている）

- 2 神宮文庫蔵 天明四年写本『牛頭天王縁起』

（※最初の「牛頭天王縁起」に続き「八王子祭文」が載せられている）

##### iii 仮名本

- 1 西田長男氏蔵 室町写卷子本『牛頭天王縁起』

- 2 『祇園社記』卷四所収 慶長三年写本「感神院祇園牛頭天王御縁起」  
 王御縁起」  
 iv 仮名本（片仮名本）

- 1 東北大学附属図書館狩野文庫蔵 文明十四年写本『牛頭天王縁起』

(二) 『神道集』所収 「祇園大明神事」

(三) 寛文・延宝年間頃刊本『祇園御本地』卷四所収 「祇園社縁起」

【二】非「祇園牛頭天王縁起」（祇園社祭神に関する「牛頭天王縁起」）

(四) 十卷本『伊呂波字類抄』所収 「祇園」

(五) 『二十一社註式』所載 祇園社縁起

【三】非「祇園牛頭天王縁起」（祇園社以外の祭神に関する「牛頭天王縁起」）

(六) 『峯相記』所収 「廣峯山縁起」

(七) 『神道集』所収 「赤山大明神事」

(八) 広島県三次市須佐神社蔵 『須佐神社縁起』

(九) 『神道雑々集』下巻所収 「牛頭天王日域応現時節事」

(一〇) 愛知県津島市興善寺蔵 天文九年写『牛頭天王講式』

(一一) 愛知県津島市津島神社蔵 室町末々近世初期写か 『牛頭天王縁起並年紀』

(一二) 愛知県津島市津島神社蔵 室町末々近世初期写か 『津島牛頭天王祭文』

(一三) 滋賀県田中神社蔵 『若林天王社牛頭天王縁起』

【四】非牛頭天王祭神縁起

(一四) 「感應寺縁起」

i 非流布本系

1 『阿娑縛抄』諸寺略記所収 「感應寺縁起」

ii 流布本系

- 1 『元亨釈書』寺像志所収 「感應寺縁起」  
 2 金沢文庫蔵 『観音利益集』所収「河崎観音」  
 3 『搥囊鈔』七観音事所収 「感應寺縁起」  
 4 『塵添搥囊鈔』七観音事所収 「感應寺縁起」  
 5 国会図書館蔵 明暦四年写本『観音縁起』  
 (一五) 兵庫県神戸市近江寺蔵 『播州近江山近江寺縁起』

## II 牛頭天王に関する祭文

### 【一】陰陽道・修験道系祭文

(一六) 信濃国分寺蔵 文明十二年写本『牛頭天王祭文』

(一七) 醍醐寺三宝院蔵 文明十七年写本『牛頭天王祭文』

(一八) 宮地直一蔵 天文十九年書写卷子本『灌頂祭文』

(一九) 尾張三河花祭祭文 寛永十年書写『牛頭天王島渡り』

### 【二】神道系祭文

(二〇) 神宮文庫蔵 宝暦八年書写『牛頭天王之祭文』

(※神宮文庫蔵 天明四年写本『牛頭天王縁起』所載「八王子祭文」)

### 【三】その他祭文

(二一) 高知県香美市物部町 「いざなぎ流祭文」

1 小松キクジ太夫蔵 『天行正祭文』

2 中尾計左清太夫蔵 『天下小察（祭）ノ文』

(二二) 広島県旧佐伯郡山田家蔵 室町末期書写か「天刑星祭文」

## III その他（非寺社縁起・非祭文）

(二三) 『三國相伝簠篋内傳金烏玉兔集』

i 流布本系

ii 非流布本系

iii 『簠簋内傳』注釈書

- (二四) 名古屋市立博物館蔵 『牛頭天王之本地』
- (二五) 京都市妙法院蔵 観応元年写 『神像絵巻』
- (二六) 天文本 『伊勢神楽歌』所収 「天わうの哥」
- (二七) 陸奥遠野早池峰神社大出神楽 「式外八番 牛頭天皇」
- (二八) 『備後東城荒神神楽能本集』 「祇園の能」
- (二九) 謡曲 『祇園』
- (三〇) 近世期成立 「河原由来書」
- (三一) 近世期成立 「河原細工由緒記」

## 0 「牛頭天王縁起」に関連する縁起類

- (三二) 『釈日本紀』所収 「備後国風土記」逸文「疫隅国社縁起」
- (三三) 奈良国立博物館蔵 増田家乙本『地獄草子』「辟邪絵 天刑星」
- (三四) 高知県香美市物部町「いざなぎ流祭文」

1 中尾計左清太夫蔵『山の神の察(祭)文』

2 竹添喜譜太夫蔵『山王神代神官祭文』

以下、分類についてごく簡単に説明したい。

まず、先述の通り、0が非「牛頭天王縁起」、即ち牛頭天王信仰と密接にかかわる縁起類を指す。先にあげた(三二)『備後国風土記』逸文の他に、(三三)「辟邪絵」の「天刑星」並びに(三四)「いざなぎ流祭文」二本を加えた。この(三三)は、天刑星が疫鬼であり悪鬼である牛頭天王を喰らい、退治する様が描かれており、牛頭天王と天刑星とが習合する前の姿であること、かつ疫鬼、悪鬼の類として牛頭天王が描かれていることなど、牛頭天王信仰を検討する上で重要な史料といえよう。<sup>88)</sup>

さて、「牛頭天王縁起」を見ていくが、Iの寺社縁起は、さらに【一】と【四】と分けた。【二】・【三】の非「祇園牛頭天王縁起」とは、「祇園

牛頭天王縁起」に共通して見られる縁起の語型、即ち蘇民将来譚を含まない「縁起」を指す。【二】(四)の十卷本『伊呂波字類抄』は、鎌倉初期頃成立と推定されており、当然そこに収められる縁起はそれ以前の成立であろう。従って、「牛頭天王縁起」の中では最古の成立と考えられる。この(四)に蘇民将来譚が含まれてない点に着目したい。ここでは、武塔神と牛頭天王との習合が見られる他、また牛頭天王の出自が天竺北方であり、父は東王父、母は西王母であるとするなど、完全な異国神として描かれているのである。この縁起がどのように創られたものかは定かではないが、(四)に収録する前から存在していたことは確かであろう。次に【三】だが、それぞれ(六)は広峯社、(八)は小童の祇園社(現須佐神社)、(九)～(一二)までは津島天王社、(一三)は若林天王社(現田中神社)の祭神としての牛頭天王の由来が示されたものである。また、(七)「赤山大明神事」は、赤山大明神と牛頭天王との習合を示しており、ここでしか見られない記述である。これら【一】～【三】は牛頭天王が特定社寺の祭神として祀られた縁起であったのに対し、【四】(一四)の感應寺縁起、(一五)の近江寺縁起は共に、地主神かつ、寺院の伽藍神としての牛頭天王が登場する縁起となっている。そして双方とも、寺院の本尊には観音菩薩が置かれており、(一四)ではその観音の利益を牛頭天王が内包している形となっている。なお、(一四)は非流布本、流布本とさらに二系統に分けているが、詳しくはまた稿を改め記したい。

次にIIであるが、寺社縁起とは異なり、修験者や法師陰陽師らによって使用されたことを考えると、恐らくはここに掲載したもの以外にもまだ多くの縁起が存在していると考えられる。中でも【三】は、修験者や法師陰陽師以外の民間の宗教者実践者による祭文であり、その広がりや全国的なものではなかったかと推察できる。今回あげた(二一)、(二二)

は共に「天刑星」と牛頭天王との習合を示すものであるが、(二二)の1などでは、「祇園牛頭天王大明神」と記されている。祇園社の由来を説くものでないにも関わらず、「祇園牛頭天王」と記す点から、祇園社祭神としての牛頭天王が、祇園社の縁起を離れて広がっていったことを示すものと考えられよう。

最後のⅢは、分類上、「その他」と大変雑駁な括り方になっているが、(二二三)『簞篋内傳』や(二二五)の神像絵巻、(二二六)の神楽歌、(二二七)の神楽、(二二八)、(二二九)の謡曲(能)と様々な形態で牛頭天王の由来が示されている。これらもまた、橋本が説く縁起性を持つもの、即ち「牛頭天王縁起」として検討していく必要がある、いずれ稿を改め論じたい。

以上、雑駁ではあるが従来、論じられてこなかった「牛頭天王縁起」に関する基礎的考察及び作業を述べてきた。基礎的研究と題しただけに、具体的考察に乏しくまた、消化不良な面もあり、課題も山積したままではあるが、本論の果たすべき役割を考えまはここで擱筆したい。

## 注

- ① なおこの論考は同誌に都合六回(一八巻一、四、五、八、九、一二号)にわたり発表された。後に『日本仏教史研究』第一巻(岩波書店、一九八三)に再録。
- ② 早くは、西本浩文「平安朝初期の神仏の交渉」(『竜谷史壇』九号、一九三二)、家永三郎「飛鳥寧楽時代の神仏関係」(『神道研究』第三巻第四号、一九四二)。原田敏明「神仏習合の起源とその背景」(『日本宗教史論』中央公論社、一九四九年)、堀一郎「神仏習合に関する一考察」(『印度学仏教学論集——宮本正尊教授還暦記念論文集』、三省堂、一九五四)などがある。その中でも、辻説を根本から批判し、修正した田村圓澄「神仏関係の一考察」(『史林』三七巻二号、一九五四)は、後の「神仏習合」研究に多大な影響を与えた。

「牛頭天王縁起」に関する基礎的研究

- ③ 佐藤弘夫「神・仏・王権の中世」(法蔵館、一九九八)。同『アマテラスの変貌』(法蔵館、二〇〇〇)。
- ④ 佐藤前掲論考。
- ⑤ 吉田一彦「多度神宮寺と神仏習合」(『古代王権と交流 四 伊勢湾と古代の東海』名著出版、一九九六)。なお吉田の説は、津田左右吉の説(『日本の神道に於ける支那思想の要素』『東洋学報』二五・二六巻、一九三六・三七)を引き継ぐものである。
- ⑥ 天野信景「牛頭天王辨」宝永元年(一七〇四)。
- ⑦ この点に関する指摘は斎藤英喜「陰陽道の神々」(佛敎大学通信教育部、二〇〇七)に詳しい。
- ⑧ 三崎良周「牛頭信仰と密教的要素」(『印度学佛敎学研究』第四巻第一号、一九五二)。
- ⑨ 古代文学会編「祭儀と言説——生成の〈現場〉へ」(森話社、一九九九)では、テキストから宗教実践者の神を祭る〈現場〉、あるいは宗教実践者そのものを見出す「現場論」という方法論が提唱されている。
- ⑩ 北条勝貴「聖地を巡る言説・儀礼・実践」(『聖地と聖人の東西』、勉誠出版、二〇一一)。
- ⑪ 平田篤胤「牛頭天王曆神辨」文政六年(一八六二)。
- ⑫ 小林百枝「牛頭天王考」近世後期。
- ⑬ 松浦道輔「感神院牛頭天王考」近世後期。同「祇園牛頭天王考」近世後期。
- ⑭ 三崎前掲論考、並びに同「中世神祇思想の一側面」(『フィロソフィア』第二九号、一九五〇)。
- ⑮ 吉井良隆「牛頭天王・武塔神・素戔嗚尊」(『神道史研究』第一〇巻第六号、一九六二)。
- ⑯ 拙稿「スサノヲと祇園社祭神——『備後国風土記』逸文に端を発して——」(『論究日本文学』第九二号、二〇一〇)。
- ⑰ 斎藤英喜「荒ぶるスサノヲ、七変化」(吉川弘文館、二〇一二)。
- ⑱ 西田長男「祇園牛頭天王縁起の成立」(『御霊信仰』、雄山閣出版一九八四)。なお、初出時原題は「祇園牛頭天王縁起の諸本」上・中・下(『神道史研究』第一〇巻第六号、第一二巻第二、三号)。

- 19 松本隆信『中世における本地物の研究』（汲古書院、一九九六）。
- 20 岩佐貴三「陰陽道祭文と修験道祭文——牛頭天王祭文を例として——」（『印度學佛教學研究』第二三卷第一号、一九七三）。
- 21 村上學『神道集』の世界（『説話集の世界Ⅱ 中世』、勉誠出版、一九九二年）。
- 22 今堀太逸「疫神と神祇信仰の展開——牛頭天王と蘇民将来の子孫——」（『仏教史学研究』第三六卷二号、一九九三）、同「牛頭天王縁起の成立」（『国文学解釈と観賞』第六〇卷第二号、一九九五）。
- 23 八田達男「牛頭天王信仰の初期段階における展開」（『御影史学論集』第二二号、一九九七）。
- 24 金賛會「本解「ソニンムクツ」と「牛頭天王縁起」（『本地物語の比較研究』、三弥井書店、二〇〇一）。
- 25 宮家準「牛頭天王信仰と修験道」（『國學院雑誌』第一〇三卷第一号、二〇〇二）。
- 26 本論では詳細述べないが、祇園社の創祀については、久保田収「八坂神社の研究」（臨川書店、一九七四）や村山修一『日本陰陽道史総説』（塙書房、一九八一）などの論考がある。
- 27 例えば、前掲の今堀論考（「疫神と神祇信仰の展開」）では祇園社を「仏法の場」であり、「祇園天神堂」に祀られていた「天神」は元来、牛頭天王とは違う神で、後に習合した、と説いた。それに対し、中井真考は「祇園社の創始と牛頭天王——今堀太逸氏の所論に寄せて——」（『鷹陵史学』一九号、一九九四）で、祇園社は創祀以来、「社」として存在し続け、「天神」も牛頭天王の別称であり、創祀当初から祭神である、と反論している。
- 28 山本ひろ子『異神』（平凡社、一九九八）。
- 29 テクスト内における場の変貌については、アンダソヴァ・マラル「古事記における「出雲」とシャーマニズム——ホムチワケの出雲訪問の考察を
- 通して」（『日本文学』第六一巻二号、二〇一二）。
- 30 志賀剛「地方の祇園社より見たる牛頭天王信仰」（『神道史研究』第一〇巻第六号、一九六二）。
- 31 松前健「祇園牛頭天神社の創建と天王信仰の源流」（『角田文衛博士古稀記念 古代学叢論』角田文衛先生古稀記念事業会、一九八三）。
- 32 福田晃「牛頭天王の妻どい」（『京の伝承を歩く』京都新聞社、一九九二）。
- 33 真下美弥子「『梅津長者物語』と『牛頭天王縁起』（『伝承文学研究』第五十一号、二〇〇一）。
- 34 桜井徳太郎「縁起の類型と展開」（『寺社縁起』岩波書店、一九七五）。
- 35 橋本章彦「新しい縁起研究に向けて」（『寺社縁起の文化学』森話社、二〇〇五）。同「縁起学への招待」（『遊楽と信仰の文化学』森話社、二〇一〇）。
- 36 前掲斎藤論考（『陰陽道の神々』）。
- 37 前掲西田論考、松本論考、今堀論考など。
- 38 「辟邪絵」に関しては小林太市郎「辟邪絵巻に就て」（『大和絵史論』全國書房、一九四六）に詳しい。
- 39 土井洋一「学習院大学蔵 伊呂波字類抄 解題」（『古辞書音義集成』第十四巻 伊呂波字類抄』汲古書院、一九八六）。
- 末筆になりましたが、中西健治先生には大変お世話になり、ご教示を賜りました。博士前期課程から日本文学を専攻することになった私に対して、大学院入学当初より気にかけてくださったこと、日本文学を専攻する研究の徒として、どのような姿勢であるべきかを教えてくださったこと、厚く御礼申し上げます。
- （本学大学院博士後期課程）